

SICF12 グランプリアーティスト展 福士朋子「出口／入口」

会期：2011 年 10 月 28 日（金）～10 月 30 日（日）

会場：ショウケース（スパイラル 1F）



『space/surface』（2011 年）450×600mm
ホワイトボード、油性マジック、マグネット他

ロッカーなどオフィス用品が並ぶ無機質な空間、
昨日と今日が区別できないような出口のない日々。
つぶやきは世界を変えるのか。

開催概要

SICF12 グランプリアーティスト展 福士朋子「出口／入口」

会期：2011 年 10 月 28 日（金）～10 月 30 日（日）

会場：ショウケース（スパイラル 1F）

時間：11:00～20:00 入場無料

主催：株式会社ワコールアートセンター

企画制作：スパイラル

公式ウェブサイト：<http://www.sicf.jp>

公式ツイッター：[sicf_spiral](https://twitter.com/sicf_spiral)

■取材に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。

スパイラル／株式会社ワコールアートセンター 広報部 加藤美穂、清水さえみ、四元朝子（よつもと ともこ）

〒107-0062 東京都港区南青山 5-6-23 TEL 03-3498-5605 FAX 03-3498-7848

E-mail press@spiral.co.jp <http://www.spiral.co.jp/>

展覧会概要

スパイラルでは、SICF12のグランプリ受賞者、福士朋子による展覧会『出口／入口』展を2011年10月28日(金)～30日(日)にかけてショウケース(スパイラル 1F)で開催します。

ありふれた素材と漫画の手法・構造を用い、パーソナルな気づきを等身大に表現

福士朋子は、ホワイトボードやマグネット、ダーツや油性マジックなど、誰でも手に入るありふれた大量生産品と親しみのある漫画の手法を使い、自分の小さな思いつきや心の中のつぶやきを等身大で描きます。たとえば、機内食の肉料理と魚料理を選ぶときの戸惑いなど、ふとした時にぼんやりと頭の中で思い描く想像や独り言のようにささいなエピソードで、そこには、社会にインパクトを与えるような「大きな物語」はありません。

とるに足りない個の声を顕在化させる福士の試みは、私たち現代を生きる個人がどれほど声を上げてもなかなか思う通りに進まない時代の閉塞感やもどかしさを感じさせます。同時に、Twitter の出現によって、パーソナルな声の集積が社会の大きなうねりを産み出している今日において、個人の「小さな声」が国をも転覆させかねない力を持ち始めた今という時代の流れとも共振します。

ショウケースをオフィス空間に見立て、インスタレーションを展開

本展では、複数のドアを持ち、出入りの流れが複雑なショウケースという空間を読み説き、「出口／入口」をテーマにインスタレーションを展開。ショウケースをオフィスに見立て、ロッカーが並ぶ無機質な空間に新作を展示します。

繰り返される昨日と今日が区別できないような日々。出口の見えない毎日の中で生まれては消えていくささやかな思いや、つぶやき。日の目を見ることのなかった「小さな声」が形を持った時、そこには、明日を変える大きな力が潜んでいるのかもしれません。

この機会にぜひ本展の取材、掲載をご検討くださいますようお願いいたします。

作家紹介**福士朋子****●プロフィール**

青森県生まれ。

2005 年 東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻油画修了

現在 女子美術大学准教授

□主な個展

1998 年 INAX ギャラリー(東京)

2004 年 ギャラリーアートもりもと(東京)

2005 年 藍画廊(東京) / art& river bank(東京)

2007 年 ギャラリーアートもりもと(東京)

□主なグループ展

1999 年「VOCA 展 '99」(東京)

2003 年「DOMANI・明日展 2003」(東京)

●作家コメント

ショウケースでは「出口／入口」をテーマに展示を行う。スパイラルの玄関でもあるショウケースは、この空間自体にドアが複数あり、出入りの流れが複雑な場である。普段は意識しない「出る／入る」という動作や、出口が入口でもあることなど、その他特にその関係に疑問を持たないようなシンプルな反対語、対照語を元に制作した作品を展示する。フェンスの内／外で分けられた空間、機内の非常口、日本の伝統空間の内／外の境界についてなど、これまでの作品のテーマをさらに発展させて、マンガの「コマ割り」や、「内語」という声には出さずに考えている言葉などを用いて、すぐに忘れてしまうような一瞬の経験や意識、声にならない声を留めていきたいと思っている。

●最新プロジェクト

NPO 法人アートイニシアティブ東京×東京アートポイント計画 ストリートペインティング・プロジェクト
東京芸術劇場(池袋)仮囲い壁面のための作品展示中！

タイトル:「見て見て☆見ないで」

展示期間:2012 年 8 月まで

東京都が主催するストリートペインティング・プロジェクトの一環として、東京芸術劇場(池袋)の仮囲い壁に作品を展開。壁の中が一時的、部分的に見えなくなることをテーマに、12 点の絵画作品を制作しています。「ラッキーちゃん」という女の子のキャラクターとマンガの形式を使い、「見る／見られること」について考えたり、普段は意識しない様々な「視点」に気付くような仕掛けとなっています。



参考資料

●SICF 出展作品（一部）



左：『また翼横の席になった日』（2011 年） 1200×900mm / ホワイトボード・油性マジック・マグネットシート
 中：『no exit』（2011 年） 1200×900mm / ホワイトボード・油性マジック・マグネットシート
 右：『内は外』（2010 年） 1200×900 mm / ホワイトボード・油性マジック

●審査員コメント

浅井隆(アップリンク社長/webDICE 編集長)

例えば、華美な装飾の無い漆塗りの重箱、例えば昔の和傘を開いた時、美しいと思う。職人の技から“美”を感じる。このようなモノとアート作品はなにが違うのかを考えてみると、それは職人とアーティストの違いになる。職人は同じモノを作り続け技を磨き、極め、美しいものを作る。一方アーティストはというと近代以前は美しいモノを作っていた。しかし現代アート、その中でもコンセプチャル・アートというジャンルが産まれてからは、モノではなく、世界の構造や、考え方を提示するのが作品となる。そこにコンセプトがあればモノでなくてもいい。優れた現代アートはそのコンセプトそれ自体が美しい。職人は同じものを作り続ける。現代アートのアーティストは同じモノでないモノを作る。コンセプトは同じことが多いが。

福士朋子の受賞作はホワイトボードに漫画が描いてあり「内と外」など二つの場所、視点を描いていた。今度の作品は再びホワイトボードを使用し「入口／出口」がテーマだと言う。新しい作品では、彼女の作るモノではなくコンセプトが美しいかを見てみよう。福士朋子はレディメイドを作品に使用する正しい現代アートのアーティストなので。

佐藤尊彦(ビームス販売促進本部プレス)

マンガとユーモアは相性が良い、と思う。

シリアスな問題を異なる視点で提示してきた風刺マンガや、わずか 4 コマの中に物語を収める 4 コママンガといった表現手法の、その独特の視点には大きな魅力を感じますが、とりわけシニカルなユーモアにはグッときてしまいます。

今回展示された福士朋子のペインティングは日常生活の中でしっかりと“個”の視点を生かしたマンガの手法を上手く取り入れ、それを見慣れた素材を使用したインスタレーションで表現した彼女のブースには程よいユーモアが漂っていました。10 月の展示には福士さんの新たな視点に会えそうです。期待しています。

●福士朋子 過去作



『黄色い家の外』（2010 年）173×213 mm
 ホワイトボード、油性マジック、マグネット



『ある土曜日に』（2007 年）530×455mm
 キャンパス、アクリル

紫牟田伸子(デザインプロデューサー／ジャーナリスト)

SICFの会場の中で、最も脱力した作品だったんじゃないかと思う。日常の気づきというよりなんだかどうでもいいようなもの。ホワイトボードの上に書いてあるけれども、それでメッセージを送りたいわけじゃないようだった。ただ、ホワイトボードの上に書いてある。マンガのコマのようだけど、コマとコマの間の白いスペースが、画面を力でぶった切っていて、コマとコマの間をつなぐことなんか拒絶しているみたいだった。つぶやいているようだけど、つぶやきじゃなくて、マンガのようだけどマンガじゃなくて、飛行機好きのようだけどそうでもなくて、旅行もしたいようだけどそうでもない。そんな「そうでもない」がコマとコマの間の空間でつながれていたのだった。

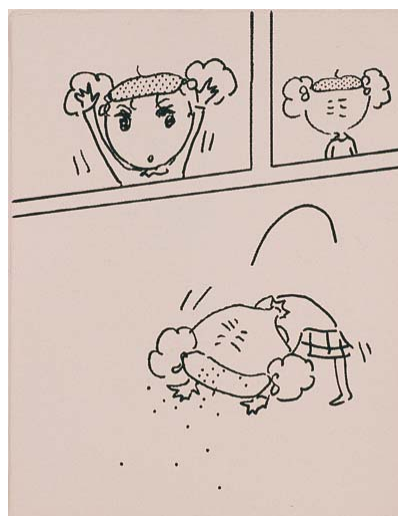
「そうでもない」のもどかしさを解き放っていないところに現代があるのではないかと感じたのである。

南條史生（森美術館館長）

「出口は入り口なのか、入り口は出口なのか」

SICF12で受賞した福士朋子は、ホワイトボードに描いた漫画というか、いたずら書きのような脱力系描画である。エスカレーターの上に向かう光景と下に向かう光景が対比されて描かれたり、金網の向こうに飛行機が飛んでいたり、なんか日常的。お相撲さんが勝負している土俵の内側が私の外側だと言う対比と逆転の発想。これはいったいなんなの？今の時代を表しているのか、共振しているのか、それともずれているのか？

今回の展示のテーマは「出口／入口」。なにか、意味ありげで、トートロジー（同義反復）のような響きがある。オフィス家具などと一緒にホワイトボードが登場するらしい。ということは平面作品が、彫刻のように物体としてインスタレーションの一部となるわけで、その点では空間的な表現ということになるだろう。それはヘタウマ描画の周りに、新たな文脈が産まれるという事でもある。不可解で行き場のない時代感覚が、もう一度現実の中に置かれる現場を早く見てみたい。



『ラジオ体操』（2005年）140×180 mm
キャンパス、油性マジック



FAX マンガ『ラッキー☆ラッキー』（2005年）

NEWS

SICF13 開催決定！

SICF(スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル)は、自由な感性で質の高い創作活動を行うクリエイター100組にプレゼンテーションの場を提供しています。

【開催概要】

会期:2012年5月3日(木・祝)～6日(日)

会場:スパイラルホール(スパイラル 3F)

参加クリエイター募集期間:

2011年11月1日(火)～2012年2月29日(水)

公式ウェブサイト: SICF ウェブ <http://www.sicf.jp>

公式ツイッター: SICF Twitter @sicf_jp

主催:株式会社ワコールアートセンター

企画制作:スパイラル

募集に関する新着情報は、SICF ウェブで随時お知らせいたします。



『Loci-4』（2004年）278×220 mm
綿布、パネル、膠、顔料